

<研究紹介>

アイドル・オーディション越しに見る社会 Society Through the Lens of Idol Auditions

塚田修一*

Shuichi Tsukada

I. アイドル・オーディション研究の面白さ

アイドル文化を対象とした研究を始めてから 15 年ほどになる。とは言っても、継続してアイドル研究を行ってきたというよりは、断続的に行ってきたという方が正確である¹⁻²⁾。特に 2010 年代終わり頃からは、アイドル研究に手詰まりを感じていたこともあり、またコロナ禍も重なって、しばらく「休業」していた。しかし、この 2、3 年で新たな切り口を見つけ、アイドル文化研究を再開することになった。それが、「アイドル・オーディション」である[†]。

アイドル・オーディション研究の面白さは、そこから「社会」が見えることである。そのことを、日本のアイドル・オーディション番組の歴史を辿りながら検討していこう。

II. 「アイドル」を作った『スター誕生！』

日本のアイドル・オーディションを語る際にまず挙げるべき番組は『スター誕生！』（日本テレビ・1971～1983 年）である。予選を勝ち抜いた出場者が決勝で審査員を前に歌唱し、芸能事務所・レコード会社のスカウトマンの札が挙げれば合格となる。桜田淳子や山口百恵、ピンクレディーや小泉今日子など、この番組出身のアイドルは枚挙にいとまがない。

この番組の大きな功績は、オーディション自体を、審査する側も含めて可視化したことである。審査員であった作詞家の阿久悠は、普通の人がどこか得体の知れないものとしてイメージしている「芸能界」を、この番組では「ガラスばり」にしようと考えた。「合格した人を、誰と誰が関心を持ち、誰がスカウトし、どういうトレーニングを受け、今どんな状態にあって、いつ世の中に出て行く予定があるのか、関わった人の顔が全国の人々にわかるようにしたいんだ」³⁾。こうしたオーディションの可視化は、後続するオーディション番組の雛型となる。

この番組のもう一つの重要な功績が、「アイドル」という言葉の意味を変えたことである。辞書的には「偶像」「崇拜される人や物」という意味の「アイドル」は、かつては野球選手やビートルズ、洋画スターを指して使われる言葉であった。それが、1970 年代から「低年齢の美少女」を意味するようになる。そうしてしまったのがテレビであり、また『スター誕生！』であったという背景を、阿久は次のように記している。「テレビを通じての日常性の

* 相模女子大学

† 放送文化基金 2020 年度助成「アイドルオーディション番組の総合的研究～歴史的、メディア論的、比較文化論視点から」に研究協力者として参加したのがきっかけである。その成果は、太田省一・塚田修一・辻泉編 2025. 『アイドル・オーディション研究』. 青弓社にまとめられている。

スターの発掘、新時代の自然な鮮度ということを求めたために、現象としては、美少女の低年齢化ということにつながり、それがどこかで混同して、低年齢の美少女とアイドルがイコールとなってしまったもののようである」³⁾。

さらに興味深いのは、阿久が当番組の審査基準として、「下手を選びましょう。それと若さを」と審査員に呼びかけていたことである。つまり、「歌が上手い、完成された人」ではなく、「未熟だけれど、何か感じるころのある人」を選ぼう、というわけだ。すると、『スター誕生！』が作った「アイドル」には、「低年齢の美少女」に加え、「未熟さ」という意味も付け加えられていることになる。

『スター誕生！』から見えてくるのは、社会の中での「アイドル」の立ち位置と、「アイドル」と社会との距離感であり、それらがテレビというメディアによって形作られていることである。

Ⅲ. リアリティショー化する社会

1990年代に時を進めよう。この時代を代表するオーディション番組が、鈴木あみ（現・鈴木亜美）やモーニング娘。を輩出した『ASAYAN』（テレビ東京・1995～2002年）である。この番組は、従来のオーディション番組のように、スタジオでのオーディション審査の様子を写すのではなく、オーディションの「過程」をリアリティショーとして見せた。出場者たちが悔し涙を流したり、課題に四苦八苦したり、といった姿を映し出すのである。

『ASAYAN』が現在のオーディション番組に残したものは多い。オーディションの「過程」を見せることで、視聴者は出場者の「成長」を追いかけることが出来るようになっている。また、オーディション番組がリアリティショーとなったことで、視聴者は、出場者同士が闘争心を燃やしたり、時には励まし合ったりする「関係性」を楽しんでいる。1990年代までにテレビが開拓したオーディション番組のフォーマットの延長上に、現在のアイドル・オーディションが存在しているのである。

さらに考えておくべきは、こうしたオーディション番組のリアリティショー化は、社会のリアリティショー化と呼ぶべき事態と重なっていたことである。同時期には、「見られているかもしれない不安」よりも、もはや「見られていないかもしれない不安」に社会が支配されていることが指摘され始めていた⁴⁾。リアリティショーで他人の人生を覗き見ると同時に、自らも常に他人から見られていないと落ち着かない。そんなリアリティショー化する社会が到来していた。

Ⅳ. オーディションが変わる／社会が変わる

最後に、（「アイドル」ではないが）最近のオーディション番組にも触れておこう。「身長、体重、年齢はいりません。ただ、あなたの声と人生を見せてください。」これが2024年に開始された「ノノガ」（『No No Girls』[‡]）の応募メッセージだ。プロデューサーのちゃん

[‡] YouTube、Hulu にて 2024 年 10 月～2025 年 1 月にかけて配信。

みなは、これまでにさまざまな場面で「No」を突き付けられた経験のある候補生一人ひとりのパフォーマンスと人生に真摯に向き合う。抱えたコンプレックスを涙ながらに吐露する候補生には、「それ、昔の私と同じ」と受け止め、前を向くようポジティブな言葉をかける。また、時間と言葉を尽くして一人一人に審査結果を伝えていく。この番組は、候補生に徹底的に「寄り添う」オーディションなのだ。

寄り添った分、脱落を伝えるのは苦しい。脱落者に審査結果を伝え終わったらちゃんみなは、「こればかりは、つらいね」とつぶやく。選ばなければならない側の苦悩も番組は映し出す。それでも、残念ながら次に進めなかった候補生には今後への期待と、サポートを約束する。この番組は選ばれなかった側にも寄り添うのである。オーディションは、どうしても合格者と不合格者の選別が伴う冷酷なシステムである。スポットライトが当たるのは、常に選ばれた側である。しかし「ノノガ」が見せるのは、冷酷なオーディションのなかの温かさや希望である。

オーディションで不合格となった出場者はどうなるのか。最近のオーディション番組においては、合格がかなわなかった出場者が、「育成枠」として事務所に所属し、後に別のグループで活動することもある。また、別のオーディションに参加してデビューをつかむ場合もあるし、個人でインフルエンサーとして活動する例もある。「落ちたら終わり」ではなく、「その後」が用意されているのである。

すると、現在、人々がどんなオーディション番組を求めているのかが見えてくる。自分の推しが審査員から酷評されるような残酷ショーは見たくない。審査員の誠実なコメントと寄り添う姿勢、不合格だったとしても「その後」も応援し続けられること。総じて、ファンが安心して応援できる、「優しいオーディション」が求められているのだ。

オーディション番組から社会が見えてくる——。そうであるならば、かつては審査員が出場者にダメ出しをし、理不尽な課題を課すのも当たり前だったオーディション番組が、敗者にも寄り添う、優しいものへと変わり、それが女性から支持されていることの意味、そして社会で困難や生きづらさを感じてきた世代がプロデュースしていることの意味を考える必要がある。

文献

1. 塚田修一. (2012). 彼女たちの憂鬱：女性アイドル“冬の時代”再考. 鈴木智之・西田善行編『失われざる十年の記憶』所収, 青弓社.
2. 塚田修一, 松田聡平. (2016). アイドル論の教科書. 青弓社.
3. 阿久悠. (2007). 夢を食った男たち「スター誕生」と歌謡曲黄金の70年代. 文藝春秋.
4. 北田暁大. (2011). 増補 広告都市・東京. 筑摩書房.

